

News Letter

中国四国農政局
松山地域センター

【「興味があれば農業は楽しい」 女性新規就農者の取り組み】

「青いレモンの島」で知られる瀬戸内海に浮かぶ上島町岩城島。ここで新しく農業を始めた大井 十和子さんの取り組みをご紹介します。

大井さんは大阪府でOLをしていましたが、自分で食べ物を作りたいという思いから、農業ができないかと調べている中で上島町の「島おこし協力隊」のを知り、会社を退職して平成23年から2年間、協力隊員として上島町で農家の農作業をお手伝いすることとなりました。

実際に農業をやってみると苦労より楽しいことのほうが多く、お手伝いではなく是非自分で農業をやりたいと、25年10月から岩城島で農業を開始しました。

農地は協力隊で知り合った農家の方に紹介してもらい、50aの畑でレモン、温州みかん、八朔などの柑橘と野菜を栽培しています。



「女性就農者の大井さん」

今は、柑橘の出荷ができるまで木が生長していないため、野菜を今治市の産直市「さいさいきて屋」に出荷しているだけですが、今後柑橘が収穫できるようになり年間を通じた出荷が軌道に乗れば、経営面積を増やすことも検討したいそうです。

農業ではなるべく農薬は使いたくないので、収量が維持できる範囲で減農薬に取り組んでいるとのことで、今は知り合いの農家のアドバイスを受けながら農業技術を勉強しているところです。



愛情込めて作ったレモン

「OL時代に比べて収入は減ったけれども、やりたい農業ができて毎日が楽しい。農業を始めたことは後悔していないし、これからも上島町ですと農業を続けたい。物を作ることに興味があって、楽しいと思える人は農業を始められる」と大井さん。販路開拓のために、飲食店やカフェなどにも出荷できるようにしていきたい、と語る大井さんの表情は生き生きとしていました。



新しく植えた愛媛果試第28号（紅まどんな）



迫力ある取組

今般、平成26年4月6日（日曜日）に宇和島市丸山公園内宇和島市営闘牛場において宇和島闘牛大会が開催されました。会場には11時ころから観客が集い、土俵中央では本日出場する闘牛の土俵入りが次々と行われ、正午からの闘牛の開始をいまや遅しと待つ観客で埋まり、場内は熱気に包まれました。

主催者として宇和島市長、来賓の中国四国農政局松山地域センター長のあいさつのあと、いよいよ取組が始まりました。

「おーい〇〇号を出せよ～。出せよ。〇〇号を出せよ～。出せよ。」と独特のアナウンスが流れると、土俵に塩がまかれ、牛のテーマ曲とともに赤と白に分かれて屈強な牛が土俵に登場します。

勢子（せこ）が牛の頭と頭を合わせると、牛同士が自然に角と角を交えて額をつけ、鼻に通されたロープが抜かれると闘牛の開始です。そこからは人間の相撲と同じように、牛同士がお互いに有利な体勢をつくろうとせめぎあいが続きます。角と角が合わさるときには「ガツン」という音が場内に響き、牛は鳴き声をあげず一進一退の攻防が続きます。戦意を失った牛が背を向けると、「勝負あり」です。



出番を待つ牛

詳しくは以下のアドレスまで
宇和島市観光協会
<http://www.tougyu.com/>

愛媛県南予地方、宇和島市といえば何を連想しますか？「真珠」、「じゃこ天」、「牛鬼まつり」などがあげられますが、もうひとつ地元根ざした「闘牛」という伝統文化があります。

宇和島の闘牛の起源については、鎌倉時代に農民が農耕用の強い和牛をつくる中から、自然に野原で角をつき合わせ娯楽にしていたという説と、17世紀の後半頃、宇和海を漂流していたオランダ船を福浦の漁民が救助したお礼に2頭の牛が贈られ、この牛がたまたま格闘したことから始まったという説があります。

起源はともかく、享和年代（1801～1804）より土俵をもうけ本格的に闘牛を行っていた様子が藩政時代の古文書に記載されています。



化粧まわしを着けた牛

ぶつかり合う角と角、巨体と巨体。迫力ある本能の戦いは、20分を超える取組もあり、全ての取組が手に汗握る攻防でした。

「勝って4分、負けて6分、伊予人の粋な計らい」。闘牛のファイトマネーは、宇和島では牛主に対する慰めの意味から負けた牛に多く支払われます。宇和島ならではの麗しき伝統です。

近年、闘牛を巡る環境は、後継者不足、飼養環境の悪化、飼養者の減少や高齢化などで厳しさを増していますが、折りしも「和食」が「世界無形文化遺産」に登録され、日本の伝統文化が見直される機運にあります。

今後の開催は、和霊神社の大祭が行われる7月24日、お盆場所8月14日、10月場所10月第4日曜日です。皆さんも愛媛、南予の文化である「闘牛」を一度ごらんになってはいかがでしょうか。